

# 手術直後紙上患者の看護過程教授学習試案

阪井 幸恵, 藤田 倫子

高知大学医学部看護学科 783-8505 高知県南国市岡豊町小蓮

## Examination about how to teach nursing process of paper patient just after surgical operation

Yukie Sakai · Michiko Fujita

Department of Nursing School, Kochi University  
Kohasu, Oko-cho, Nankoku-city, Kochi (〒783-8505)

### 要約

本研究の目的は、学生が手術直後紙上患者の看護過程展開の学習目標に到達するための教授学習方法を分析することである。学習過程は、group work、クラス発表を行い、目標達成までレポート添削・再提出を繰り返し行った。記録内容を帰納的記述的に分析した結果、初回では「看護上の問題」<看護上の問題に対する今日の目標>「具体的な看護活動計画」の記述ができていなかったが、group work と記録目標の到達の基準に従い、レポートを添削して再提出を求めたところ、全てのグループが内容を訂正し記録を完成させることができた。その結果、個別集団学習によるgroup work、クラス発表、グループ別レポートの提出に加えて、学習目標を明示し、そこに到達できるまで繰り返してグループ個別指導を行うことが看護過程の展開を理解させる有効な教授学習方法として活用できると考えた。

### Abstract

The purpose of this research is to examine how to teach for nursing students nursing process of paper patient just after surgical operation to arrive the study aim. The study program was group works, announcement, and report. We repeated that we checked students' reports and that we let the students submit reports again. The analysis was inductively and descriptively. As a result, all groups were able to perfect the reports about nursing process after our study program.

キーワード：紙上患者, 看護過程

Key words: paper patient, nursing process

## 緒言

近年、医療の高度化に伴い、看護教育においても科学的根拠を基盤にした看護を展開、専門性、質のよい看護を教育することが求められている。看護を実践する上で系統的に看護ケアの方法を導くために、看護過程は重要である。R. アルファロールフィーヴァは、「すべての看護方法の中心にある看護過程は、人間的で成果(結果)に焦点をおき、費用効果の上がるケアを促進する。また、看護師に自分の行為を絶えず振り返り、より良い行為をするにはどうしたらよいかを考えさせてくれる」<sup>1)</sup>と述べている。看護学生が看護過程を学ぶ最初のステップとして、紙上患者による看護過程の展開がある。紙上患者における看護過程の展開で、学生はその理解に対し困難を抱いている<sup>2) 3)</sup>。また、看護系大学において紙上患者の看護過程展開は2年次に実施されることが多く、その初学者の場合、情報において正常・異常の判断という初期の分析レベルであり、看護過程展開において教員のきめ細かい関わりの必要性が示唆されている<sup>4)</sup>。本研究では、紙上患者の看護過程展開において教員が繰り返し添削し再度 group work をするという学習方法を取り入れた。その学習方法後の提出物を分析した結果を報告する。

## 研究の目的

学生が手術直後紙上患者の看護過程展開の学習目標に到達するための教授学習方法を分析することで、今後の手術直後紙上事例展開の演習の教授学習に活用する。

## 研究方法

対象：某看護系大学生2年 57名を 9groups に編成し、この中で研究参加の同意が得られた 7groups を対象とした。

調査期間：2005年12月～2006年1月

方法：成人期にある手術直後の紙上患者の看護過程について group work による記録(情報の整理、看護目標(長期・短期)、看護問題とその目標、具体的な看護活動計画)を立案させた記録内容を帰納的記述的に分析した。

記録学習の到達目標：1)術後1日目の看護に必要な情報(手術情報、術中・ICUでの経過など)が簡潔にまとめて記述できる 2)看護の長期・短期目標を挙げるができる 3)術後1日目の看護上の問題(優先順位をつけて最低3つ)と各看護問題に対する今日の目標を挙げるができる 4)具体的な看護活動計画(各看護問題に OP・TP・EP)を挙げるができる。

演習の進め方：1)オリエンテーション 2)group work、3)クラス発表、5)各グループからのレポート提出 6)担当教員による記録の点検と学習目標に到達するまで各グループの個別指導と再提出を繰り返した。

演習の方法と内容：1)演習日程と内容(表1)、2)演習資料として①事例、②記録用紙：sequence of events (関連図)(図1)、③看護計画の用紙(図2)を配布した。①事例は、手術後1日目にある開胸術を受けた患者(表2)とし、患者の情報として生活様式や現病歴、入院から手術までの経過、手術内容(術式、時間、intake/outputなど)、ICUでの経過、Dr. の記述の一部、検査値を提示した。

表1 演習日程と内容

演習回数	演習内容	方法と次回までの課題
1	①オリエンテーション・資料の配布 ②紙上患者情報についての説明	全体に説明 ・ group work での課題 - 情報の整理、関連図の作成
2	①関連図より看護問題の明確化(各 group work を発表) ②情報と看護問題の関連を説明 ③「今日の計画」(長期目標・短期目標、看護上の問題と目標、	全体 ・ group work での課題 - 看護上の問題と科学的根拠、看護活動 「今日の計画」
3	具体的な看護活動計画)の書き方について説明 1 限目 ①「看護上の問題と科学的根拠、看護活動」 (各 group work を発表) ②group work の内容の不足部分について解説	全体
	2 限目 ①「今日の計画」(長期目標・短期目標、看護上の問題と目標、 具体的な看護活動計画) (各 group work を発表)	全体 ・ group work での課題-「今日の計画」 教員コメントを踏まえ、再度提出
適宜	「今日の計画」 再度 group work した内容を担当教員に提出。担当教員は、 看護過程で記述できていない項目を添削し、グループに返却。 再度 group work した内容を提出。	各グループ

Sequence of events	グループ名	学生氏名

<今日の計画と評価>	グループ名	学生氏名
患者に関する情報		
1. 看護目標		
1) 長期目標		
2) 短期目標		
2. 看護上の問題と今日の目標		
3. 具体的な看護活動計画		

図1 記録用紙-関連図  
(一部省略)

図2 記録用紙-看護過程

表2 事例資料(一部抜粋)

事例紹介	by pass grafting
冠動脈バイパス術を受けた患者の手術直後の看護	(on pump) 4枝
設定: あなたは、心臓血管外科病棟の新人看護師です。本日の日勤勤務で、昨日冠動脈バイパス術を受けた患者を受け持つことになりました。	② 手術内容: 吻合部位 LITA→OM RITA→LAD#8 RA→
以下の情報は、電子カルテ・ICUの看護師からの申し送りから得たものです。これらの情報を用いて、患者の問題点を挙げ、発症から社会復帰までの看護の概要について把握してください。また、この患者に対して術後1日目に実施する看護計画を具体的に立案してください。	4 PD, 4 AV ③ 手術時間: 9:33~16:18 <u>7時間45分</u> ④ 人工心肺時間: 12:04~14:30 <u>2時間26分</u>
【患者についての情報】	⑤ 大動脈遮断時間: 12:13~13:59 <u>1時間46分</u>
・ 患者: Aさん(58歳・男性)	⑥ 手術中水分出納 in take: 輸液量 3370ml 輸血量 -- 40ml (ECC blood) <u>total 3330ml</u> out: 尿量 430ml 出血量 600ml (ガーゼ出血400g、セーバー出血200ml) <u>total 1030ml</u>
・ 入院時診断名: 陳旧性心筋梗塞(前壁)、梗塞後狭心症、高脂血症	⑦ 挿入物: 心嚢・胸骨下ドレーン、右上肢静脈持続点滴ライン ペースメーカーワイヤー、尿道留置カテーテル
・ 嗜好: 20歳の頃より入院時まで喫煙(約40年間)	⑧ 装着物: ネームバンド、アキュロックスマスク(酸素12L 50%) 心電図、ペースング本体
1) 入院までの経過 2004年3月頃より冷汗を伴う胸部痛を自覚。安静にて消失していたため、そのまま放置していた。同年3月中旬、会社の健康検診にて心電図上異常の指摘を受ける。狭心症と診断され、7月入院し、心臓カテーテル検査を施行。冠動脈の狭窄をみとめたため、冠動脈バイパス術施行となった。	5) 術後ICUでの経過(手術当日のDr.記録) 『手術後、DOA5γ(15cc/h)でICU入室。入室後、心嚢・胸骨下ドレーンより30ml~50ml/hの出血あったが、徐々に減少。循環動態は安定しており、麻酔からの覚醒も良好であったため、呼吸器を離脱し、21:30気管挿管チューブを抜管。ペースメーカーは心拍数90回/分で管理。明日より内服、食事を開始する。』
2) 入院時の状態 身長155cm, 体重51kg, 血圧110/62, 体温36.4℃, 脈拍90回/分 聴診: 呼吸音・心音ともに雑音なし、触診: 浮腫なし、左右足背動脈触知良好 運動機能, 精神・言語機能: 異常なし、糖尿病所見: 糖尿病なし 胸部X線所見: 心胸郭比(CTR)46%, 12誘導心電図所見: 洞調律 心エコー所見: 壁運動良好、心臓カテーテル検査所見: 図参照 内服薬: フイトール 40mg/2回/日, バイスタミン 100mg/1回/日(手術10日前に中止)	6) ICUからの申し送り 「(上記の手術の経過について説明した後)血圧が低めで経過していたため、ノルアドレナリン(1.0mg/h)を開始しています。その後、BP100~120/50~70です。心拍は、AペースングHR90で管理されており、HR90回/hで動悸などなく、循環動態は落ち着いています。意識は清明です。朝食は、主食1/3、副食2/3摂取しています。本日、ICUで胸部X線撮影をおこなっていますので、フォローをお願いします。」
3) 入院から手術まで 3日前 入院時オリエンテーション 病棟看護師より術前オリエンテーション(呼吸訓練、弾性ストッキング購入など) 2日前 担当医師より手術の説明 ICU看護師よりICUオリエンテーション 前日 麻酔科医師より説明 当日 グリセリン洗腸施行、麻酔前投薬	7) 手術前・後の経過に関する諸データ(表1)
4) 手術の内容: 胸骨正中切開	
① 実施手術名: Coronary artery b	

### 倫理的配慮

研究者が研究目的、方法、研究への参加および拒否の自由、研究参加の有無が成績に関係しないことなど口頭および文書で説明し、承諾書を得たグループを研究対象とした。

### 結果

group work、発表会後の第1回目のレポート提出で学習目標に到達できていた項目は、情報の整理、看護目標(長期・短期)であった。情報の整理は、内容を簡潔に記述できていた(7グループ中6グループができていた)。看護目標は、退院までの長期目標と術後の短期目標を挙げる事ができていた(7グループ中5グループができていた)。

できていなかった項目は、看護上の問題、看護上の問題に対する今日の目標、具体的な看護活動計画であった。看護上の問題では、循環器合併症についての問題のみを記述(7グループ中2グループ)、優先順位をつけていないもしくは問題を1つしか記述していない(7グループ中3グループ)、6つの問題を箇条書きしないで1文章で記述(7グループ中1グループ)していた。看護上の問題に対する今日の目標は、看護上の問題が優先順位に従って記述されているグループは目標を導くことができていた(7グループ中2グループができていた)が、その他のグループは「手術侵襲からの回復を図ることができる」など抽象的な内容であった。具体的な看護計画は、看護上の問題に挙げた箇所についてはOP・TP・EPを用いて記述できていた(7グループ全て)。

記録目標の到達の基準に従い、添削して再提出を求めたところ、全てのグループが内容を訂正し記録を完成させることができた。再提出の回数は、最も早く修正・加筆ができたグループは、1回目、最も時間がかかったグループは2回目に完成できた。最も早く修正・加筆できた要因は、初回 group work の時点で目標の立案、看護問題の抽出ができており、修正・加筆箇所が具体的に表れていることであった。反対に、提出に時間がかかったグループの要因は、初回 group work 時に看護問題の抽出が不十分、優先順位の記述ができていないことから、看護過程の書き方の理解不足が認められたことであった。

### 考察

堂園<sup>5)</sup>は事例演習の授業評価で「看護計画」が理解できなかったと答えた学生が多かったと述べている。学生が理解できにくい看護過程の段階として、上野<sup>6)</sup>の研究で「問題の明確化」が記述できにくいことが明らかになった。青木<sup>7)</sup>の看護過程展開における学生の困難についての研究では、「看護問題の抽出および優先順位の決定方法」において、学生は優先順位を決定するための根拠を考えると、判断基準を考えると困難を感じている。本研究でも、看護問題の明確化で疾患特有の問題の抽出が困難であり、優先順位をつけることができていなかった。しかし、看護問題については、発表会で教員からの説明を加えたことにより、学生提出レポートでは看護問題が詳しく抽出できていたのではないかと考えられる。また、今回対象とした記述は「術後1日目にあなたが行う具体的な看護活動計画」と限定したことが、看護計画立案を容易にした理由であると考えられる。2年次の段階では、病態生理の知識不足、情報分析や解釈、問題の原因と予測に対する判断力と診断の決定能力が未熟である<sup>8)</sup>。そのため、具体的な紙上患者の状況設定を提示するこ

とが具体的な看護過程展開につながると考える。今回、記録用紙を提出させ添削し再度 group work をさせるといった学習方法を取り入れた。その結果、学生は第1回目の提出では記述できなかった項目についても教員のコメントにより漸次追加・修正できることがわかった。

#### 結語

事例検討演習において、学生の理解を得ることが難しいという研究が多い<sup>9)10)</sup>。個別集団学習による group work、クラス発表、グループ別レポートの提出に加えて、学習目標を明示し、そこに到達できるまで繰り返してグループ個別指導を行うことが看護過程の展開を理解させる有効な教授学習方法として活用できると考える。

#### 引用・参考文献

- 1) Rosalinda Alfaro-LeFevre 著 江本愛子監訳, 基本から学ぶ看護過程と看護診断, 医学書院, 2004; 3-4
- 2) 上野公子 成澤佐智子 齋藤紀子 青木萩子, 学生の困難さに焦点を当てた「看護過程」の演習評価—脳卒中慢性期の事例を用いて—, 新潟大学医学部保健学科, 7(5), 611-677, 2003.
- 3) 関妙子 鹿村真理子 高橋ゆかり 保坂さえ子 須藤絹子, 基礎看護学における学生の看護診断能力に関する調査—紙上患者事例を用いた2年次終了時における調査から—, 群馬パース学園短期大学紀要, 7(1), 29-37, 2005.
- 4) 南多恵子、近藤美月、岩本真紀、近藤裕子, 看護過程における思考能力育成のための教授方法の検討, 香川医科大学看護学雑誌, 5(1), 25-35, 2001.
- 5) 堂園道子, 成人看護学における事例演習の授業評価, 東京厚生年金看護専門学校紀要, 25(1), 6-9, 003.
- 6) <sup>2)</sup>同掲書
- 7) 青木光子 相原ひろみ 徳永なじみ 岡田ルリ子, 看護過程の展開における学生の困難—講義・演習終了後と実習終了後の分析より—, 愛媛県立医療技術短期大学紀要, (16), 55-61, 2003.
- 8) <sup>3)</sup>同掲書
- 9) 豊島由樹子 澤田和美 西堀好恵 萩弓枝 山本恵子 木下幸代, 紙上事例を用いた成人看護学看護過程演習の評価(第1報)—看護過程演習前後における学生の自己評価—, 11, 127-138, 聖隷クリストファー大学看護学部紀要, 2003.
- 10) <sup>2)</sup>同掲書

(受理日 平成18年12月19日)